

雨男とてるてる坊主

杉保里音

「ねえ、ユーちゃん？ 何してるのかな？」

後ろから、いつもより少し高い論すような声が聞こえて、反射的に体が震える。持っていたペンを、カラんと取り落とした。

「いや、その……違くて」

無理やり作った笑顔で取り繕おうとしたが、自分を見下す冷たい瞳に、声が出なくなる。彼女はこれ見よがしにため息をついた。

「それ、言ってた研究？ 言ったよね。マホウはもう使っちゃダメだって。こんなもの、使えたところで何の役にも——」

何度も聞いた言葉たちに、うん、うんと繰り返して相槌を打つ。またため息が聞こえて、顔が引き曇った。彼女の声が少し低くなる。

「ママの話なんてどうでもいいもんね……はあ、ユーちゃんいっつもそう。ママ、ユーちゃんのために言って



るんだよ？ ねえ、マホウの成績も、あんまり良くないでしょう？」

ドキリと、心臓が嫌な音を立てる。腹の底がムカムカと熱くなるのを必死で抑える。

「違うのよ。魔高なんて行かなくていいの。そんな無駄なこと。ね、ユリアナ」

再び猫撫で声を出す母に、うんと言った自分の声が、やけに遠くに聞こえる。魔高には行けない。『天気を操る魔法』を少し使える程度で、国一番の魔法の高校に、行けるはずがないのだ。そう思っているのに、その一言に頷いてしまった自分に、吐き気がした。

ユリアナが王立高等学校に合格してから、既に四ヶ月が過ぎていた。

うるさかった蝉の声は消え、雨音だけが響く。終業式、荷物の多い日に限ってである。

帰りの挨拶をして教室を出る。校舎の出入り口まで来ると、人が溢れていて、ザワザワうるさい。誰かがいるという声が聞こえて、興味本位で背伸びをする。人が避けて通る先に、傘もささずに歩いている少年がいた。

「あの子、雨の呪いをかけられたんだって」

「かわいいそー。てか、ちょっとメイワクだし」

どこか笑いを含んだ声が聞こえた。大きな声だった。彼の耳に届いて欲しいかのように。

駆け出していた。押さないで、という悲鳴が聞こえたが、歩みを進める。人混みを超えた先でパッと腕を掴む。え、と声が聞こえた。

「ま、待って！ ちょっと」

静止の音が響いたが、腕が振り払われることはなかった。行き先も考えずに、ただ走り出した。どれだけ走ったのだろうか。

「もう、いいよ、いい」

息を荒くした声に周りを見ると、人が全くいない、小さな広場に出ていた。

ごめんと言うと、いいよと遠慮がちな声が聞こえた。顔を上げると、ふわっと笑った顔。「逆に、ありがとう」

彼の名前はカイだと言う。先ほどの話の通り『雨が降る呪い』をかけられたらしい。あまり学校に来ていなかったが、夏休みに入るからと、荷物を持ちに登校したんだとか。

「僕はいいんだ、雨好きだし。ありがとうね。嬉しい。こんな僕に話しかけてくれるなんて」
困ったようにカイは笑った。曖昧に頷いたユリアナはカイの言葉を聞いてはいなかった。

不意にカイに手をかざす。一瞬、パッと空から光が落ちた。が、すぐに陰ってしまう。え、とカイが呟いた。「ダメか……やっぱ、根本から解かないと」

ブツブツ呟くユリアナに、カイが叫んだ。

「え、な、何を」

「ごめん、勝手にかけちゃって。今のは晴れにする魔法で、あ、一瞬で解けるやつな。だいじょぶ、ずっと晴れ続けるとかないから」

「なんで、どうやって」

カイは空を見上げ、震える声で呟いた。

「んー、君の呪いと、今私がかけた魔法って似てて。なんて言うのかな。難しんだけど」
ユリアナは頭を捻った。これ以上説明は理解されないだろう。信憑性が薄れては困る。

「知ってるの？ 呪い」

カイが、服を握ったのが見えた。成功か。ニヤニヤを抑えて、適当そうに言い放った。

「まあ、多少はね」

「こんなこと君に頼むの、あれなんだけど」
頼み。その言葉に、再び、心臓が脈打つ。



「と、解ける？ 僕の呪い」

上擦ったカイの声。ユリアナも、高揚感で声が高くなるのを抑えて、小さく笑った。

「ああ、解ける」

完璧だ。ユリアナは心の中でほくそ笑んだ。

学校も、友達も、魔法も、魔法も。全部諦めてここまで来た。でも、カイを見た時に、今しかないと思った。カイは『雨を降らせる』呪い。ユリアナは『天気を操る』魔法。自分の魔法を認めさせるには、いい機会じゃないか。これなら解ける。諦めるしかない私にも。

次の日、早速二人は学校の空き教室にいた。

「何したらいいかな？」

カイは少し早口だった。

「助かる。じゃあ、呪いの特徴とかってわかるか？ いつも、雨の強さが一定とか」

「うん。強さは一定で——」

カイは魔術について本当に詳しくかった。本当は自分で試せたらいいんだけど、呪いのせいで魔力が消費すると倒れちゃうから。そう笑った後、すぐに俯いてしまった。

「とうか、この本、カイの呪い系だよ。結構、呪い解こうとしてたの？」

少しの間、沈黙が落ちた。呪いに関係ないことを聞いてしまったかと、ドキドキする。少しして、カイはニコリと笑った。

「まあ、それなりに？ でも、お母さんたちに止められちゃって。危ないから——」

少し似ていると思った。ユリアナは、こんなふうに笑い飛ばせないけれど。茶化せたらいいのにといい、あえて、軽い口調で笑う。

「マジかよ。じゃあ、今やってるのもバレない方がいい？ 学校毎日来たらマズい？」
「バレないほうがいいけど、学校来るのは大丈夫……ちょっと有名らしいんだよ、その魔術師。だから、怖いってなったんだと思う」

有名。カイの前にも、呪いをかけていたのか。被呪者たちを見つけ出せば、あるいは。口を開いた。が、すぐに閉じて、言った。

「そっか。じゃあ、バレたらマズいよな」

もしも共同で呪いを解いたら、その功績はユリアナのものにはならないはずだ。それでは意味がない。呪いを解くのはカイのためではないのだから。ズキリと、胸が痛んだ。

二人は、研究を始めて三日目にして、学校を追い出された。学校で雨が降り続ければとかなんとか。そこからは、東屋のある公園に集まり、紙を広げて話し合い、検証し、落胆する日々。それは、夏休みの終盤に差し掛かってもお続いていた。諦められてしまうのではないか。半ば確信に近い思いを抱えながら、雨の降る公園に足を踏み入れた。

ふわりと、涼しい風が吹いてきた。目線をそちらへ向けると、カイが一人で立っているのが見える。それも、手を目の前の宙にかざすように。まさか魔法を使っているのか。

ダメか、と声がして、体が傾く。バタバタとカイに駆け寄った時、カイが叫んだ。
「早く、呪いを解きたい……もう、両親に迷惑かけたくないんだ！」

カイはハッとして、ごめんと言った。手が白くなるほど、グッと拳を握っている。ため息をつきそうになって、やめた。

「わかった。やりようはある」

「！ごめん、ごめん」



カイは、何度も何度も叫んだ。何で謝ると苦笑して言うのと、カイは深くお辞儀をした。息苦しい。私は利用しようとしていたのに。

「カイは、呪いかけた人のこと覚えてる？」

顔も見ずに、俯いたまま質問を投げかけた。「あんまり……五歳くらいらしいってことはわかるんだけど、記憶が曖昧で」

カイは、申し訳なさそうに首を振る。

「まあ、小さかったろうしな」

「うん、そのせいだと思っただけど……え、まさか、捕まえる気じゃ」

カイは、引き攣った笑顔を浮かべた。ユリアナは頷きながら不敵に笑った。

「君が言ったんだろ、早く解きたいって。それなら、犯人見つけて解呪させればいいだろ」

「えー？ どんだけ探してもいないのに？ 自力で解くより難しいよ。危険だし」

慌てるカイに、方法がある、とさらに不敵な笑顔を浮かべて見せた。

二人が向かったのは、王立図書館だった。司書に、過去の新聞を持ってきてもらおう。

「有名なんだろ。新聞にも載ってるんじゃない？ それに、他の被呪者も」

「あ、そうか、みんなで協力すれば……！」

カイがキラキラした目で、見つめてくる。

「一歩前進だな」

親指を立てると、カイは大きく頷いた。

心の中で、ユリアナはため息をついた。これが最善だ。間違っていないはずだ。だって。

「やっぱ、私じゃ無理だよな」

カイは小さく首を傾げた。

バサリと、ページをめくる音だけが聞こえる。ざっと見て『呪い』の文字がないのを確認しては、紙をめくる。

どれくらい経っただろうか。あ、とカイの声が聞こえて、カイの新聞を覗き込む。そこには『謎の呪い』という文字が大きくあった。

ある村で、冬にも拘わらず、三十度越えの天気が続いていた。調査の結果、ある女性にかけられた呪いが関係していると分かった。その女性に話を聞くと「せっかく魔術師様に呪いをかけていただいたのに」と泣いていた。

新聞から顔を上げると、カイも目を見開いてこちらを見ていた。思わず一つ瞬きをする。

不意にカイがユリアナの目の前に手をかざす。何をするか迷ったが、その手に自分の手をぶつけた。軽快にパチンと音が鳴る。

「やった。これで、一步前進だね」

「まあ、相手が答えてくれるか、心配だけど」

高揚感で、少し声が大きくなる。

私の成果ではなくなるけれど。晴れやかだった気持ちに、スッと影がさした。

「よし！ 同じような人、探してみよう」

気持ちを切り替えるように、再び、ページをめくり始める。何かに集中すると忘れられるかと思っただが、なかなか消えてくれないのがもどかしい。『呪い』の文字で頭を埋め尽くすくらい、じっと新聞を見つめた。何か、同じように呪いをかけられ、すぐに解呪された人の記事があった。どの人も呪いの犯人のことを『魔術師様』と呼んでいたらしい。



『強風の呪い 少女は眠り続ける』という見出しが目に飛び込んできた。

解けなかった人もいるのか、無関係なのか。とりあえず解呪できている人に話を聞き、聞き出せなかった時に訪れるようにしよう。

そう伝えようと思いつつ、この新聞が終わってからでいいかと、もう一枚めくる。

は、と息が漏れた。『儀式再開ならず』と書いてあった。儀式という言葉にドキリとする。唯一知っている儀式を思い出す。

かつてこの国は、三種類全ての魔力、火、風、水を象徴する『温度を上げる魔法』『風を操る魔法』そして『天気を操る魔法』を持った魔術師により治められ、平穏が続いていた。その平穏を作り出したのが、『神』創造の儀式だった。『神』とは、三人の魔力を使った儀式により創られた、願いを叶えてくれる存在。火の魔術師の一族が滅んでしまったことで儀式は終わりを迎えたが、風、水の一部は血筋が続いている。しかしその魔法を持つものは珍しく、魔法を使えば一族の栄誉と讃えられる。これは一族しか知らない話だ。

慌てて新聞を覗き込む。『三人の魔力』『願いを叶える』『火の魔力の代替品を作る』全てのワードが『神』を彷彿とさせた。

日付はユリアナが生まれた年で、小さいコラム。それに、研究者が突然亡くなって、儀式は未完成のまま打ち切り。ホッとため息をつく。未完成ならば、カイに話す必要はない。

もしもユリアナが水の一族であると知られたら、魔高に入らなかつたことを疑われる。落ちこぼれだとバレてしまう。失望が怖い。

次の日は、軽い資料とお金をこっそりと準備した。少し出かけることを書いた付箋を机に貼って、あの人に気づかれないように家を出る。公園では、カイが既に東屋にいた。

あらかじめ、解呪した人たちの場所は調べておいた。向かって話を聞くだけ。

歩いて歩いて、ようやく目的の街についた。

一人目の人は、優しそうな人だった。呪いの話を出した途端、鋭く睨まれて追い出されたが、『魔術師様』の情報は渡せない、と。

二人目も、三人目も同じ。しかも、移動に手間取ったせいで、三人目の家を追い出された頃には、もう十五時だった。

「もう帰る？」

今帰れば夕飯前にはぎりぎり着くだろう。仕方なく、小さく頷いた。

次の日の朝は、最新の情報を得ようと話し、別の会社の新聞を二つ買った。

一つをそれぞれで見て、情報を共有することにし、自分の担当の新聞を開く。そこにも『呪い』の文字はない。やっぱりダメか、と思いつながら、最後のページをめくる。そこには、『昼間外で遊ぶ少女』という見出しがあった。ドキリと心臓が音を立てた。これは、ユリアナのことではないか。あの人が最近のことを警察に言って、噂になって、記事になったとか。そんなこと起きるはずなのに、一度思いついてしまった妄想は肥大化する一方で、心臓がうるさい。新聞をグッと覗き込むと、少女の母親へのインタビューがあった。

『最近、娘は何か思い悩んでいるようなんです。聞いてるんですよ、何度も。言ってくればいいのに。どうしてあの子がこんな——』

パッと文字から目を離す。これ以上読みたくなかった。記者がインタビューしたのは、違う人だったのだ。だって、あの人にそんなことを聞かれていない。それでも、少し高いよそ行き声で被害者ぶる姿が見えた気がした。

ふざけている。私の悩みの根源は、紛れもない貴方なのに。

違う人の記事かもしれないのに、新聞をくしゃくしゃにした。それでも腹の中が煮えるように熱い。なぜか、



乾いた笑い声が出た。

「何か、あった？」

カイの声に、え、と間抜けな声が出た。カイは、バツと手を振って早口で言った。

「いや、あの、言いたくない事ならいいけど。でも、良ければ見せてほしい」

見せるほどのものなのか。そもそも、自分の記事じゃないかもしれないのに。それに、カイはバカにしないだろうか。たかがその程度で、と。そんなこと言うはずなのに、ため息をつくあの人とカイが重なった気がした。

「いや、大丈夫」

結局、解呪した人は口を揃えて『魔術師様のために言えない』と。少し楽観的すぎたのだ。解呪の方法を教えてくれる人がいるのなら、カイが今困っているはずがないのだから。

下を向いて、タイルの上を並んで歩く。

「また振り出しだな」

思わずため息をつく、はあと隣から同じ声が出た。顔を見合わせて、思わず吹き出す。

「ねえ、でも、ありがとう」

カイはさっきとは違い、穏やかに微笑んだ。

「解呪も出来ないかも知れど、でも、こうやって、ユリアナと旅できてよかった」

一瞬、全部の音が消えたように感じた。足元から、フワッと全身を駆け巡る感覚。何かは分からないけれど、とても暖かい。

それでも、『いい』じゃなくて『よかった』。もう終わってしまうような言い方が、少し寂しかった。だから、願掛けのように言った。

「私も、楽しいよ、この旅」

ブワッと風が吹いて髪が乱れる。

言わなければいけない。カイはため息をつかないと思えたから。

「母さんがさ、魔法、好きじゃなくて」

カイは一瞬口を開いたが、すぐにこちらを見つめた。風と雨の音だけが響く。息を吸う。

「魔法使ってると怒るから、こっそり練習してた。バレて魔法使えなくなる時もあった。でも私、才能あると
か思ってたから。それで、ちょっと他の人のこと……見下してた、かも」

静かにカイが頷いたのが見えた。話していることがグチャグチャだと思った。言いたかった、言えなかった
こと。でも、とめどなく溢れる言葉に蓋をすることができなかった。

「話す人もいなくなって、魔法も下手くそで、嫌いだった。母さんは、だからやめろって言ったのって言っ
て、ムカついたけど、文句言うとか機嫌悪くなるから。でも、この前の新聞で、昼間に外で遊ぶ娘みたいな記
事見て、母親が『話してくれれば』って。ねえ、文句言えば良かったかな、魔法やめた方が良かったかな、話
せば良かったのかな」

早口で言い切って、カイを見た。カイは目を閉じている。うん、と言って、目を開けた。

「大丈夫、まだ文句だって言えるし、魔法だってやめれる。まだ間に合うよ……ゆっくりでいいと思う。話し
たいと思えたら行けばいいよ。もし話したくなかったら、一緒に逃げちゃおう。二人で新しい研究でもする？」

カイはイタズラっぽく笑った。安堵で体が崩れ落ちそうになる。大丈夫が、染み込む。

「ごめ、ありがとう……っありがとう」

強い風いつも通りの雨に負けないように叫ぶと、カイはまた笑って、うんと頷いた。

ユリアナは空気を解そうとおどけて言った。

「てか、風強いな。嵐かな？ ……あれ？」



ユリアナはすぐに顔を伏せて考え込んだ。ぶつぶつ呟く。その頬が、どんどんと興奮したように朱に染まっ
ていく。どうしたの、と不安そうなカイに、ユリアナは顔を上げた。

「まだ、振り出しじゃないかも」

ユリアナが思い出したのは『強風の少女』の記事だった。この街の豪邸に住んでいたような。軽く探すとそ
れらしい家が見つかった。

家を訪ねると、夫婦が迎え入れてくれた。呪いの話を聞くと、最初は驚いていたが、話をしてくれた。娘ク
ララは指名手配中の魔術師に呪いをかけられたらしい。その写真を見せてもらおうと、黒髪の穏やかな女性がい
た。

「一つ、誰にも言っていないことがあります」
母親は、しどろもどろ言った。

「あの子、森にあるコテージに通っていました。テア、あ、魔術師の所に行ってたのかな」

魔術師の所。ドキリと心臓が音を立てる。

「呪いにかかる前日に、聞いてきたんです。気温がすごく上がるのと、強風が吹くの、どっちがいいかって」
まるで『神』の儀式ではないかと思った。よく考えれば、カイの呪いはユリアナの魔法と似ている。そう、
水の一族に。そういえば、儀式を再開させる研究の記事がなかったか。でも、儀式を再開させたいのならば、
補うのは火の一族の魔力のみで良い。他は一族を使えるから。そして研究者は亡くなっている。

そこまで考えて、ある最悪な仮説が立った。

研究されていた儀式は、火の一族以外も含む魔力を代替できる代物だった。しかし、完成する前に、研究が
新聞に載ってしまった。それを見た一族は、代替品の完成を許さなかった。そして、邪魔な研究者を消したの
だ。

ただのこじつけだ。第一、テアが殺された研究者でない限り、研究の詳細も知らないはずだし、代替できることを見せつけるようにカイやクララの呪いをかけないだろう。小さいコラム記事を一族が嗅ぎつける可能性も低い。でも、もし本当だったら。カイが、一族がつくった恨みの対象になってしまっていたのだとしたら。心臓がバクバクとうるさい。

そんな彼を利用しようとしているの？

「ユリアナ？ どうしたの？」

心配そうなカイに、胸が苦しくなった。

曖昧に笑うと、カイは眉をひそめた。

「じゃ、じゃあ、行ってみますね、コテージ」

慌ててドアに向かって歩き出すと、カイも急いでついてくる。家を出て、すぐに森を目指した。不意にドサッと音が聞こえた。振り向き下を見ると、カイが倒れているのが見えた。クララと同じ状態なのではないか。呪いの魔力消費量が、カイの魔力量を超えたのだ。

クララの家に戻り、ドアをノックする。

「ごめんなさい！ カイを、すいません、置いてもいいですか。頼んでいいですか」

すぐに驚いた顔のクララの母親が出てきた。

「すいません。すぐに帰ってきます。だから」

「分かりました……娘の解呪、お願いします」

静かに頷く彼女に申し訳なくて頭を下げる。

立ち上がり、ドアの方へと歩き出す。それと、と言うクララの母の声に、少しだけ振り返ると、両手を合わせてこちらを見ていた。

「どうかご無事で。いってらっしゃい」



胸が熱くなるのを感じる。久しぶりの行ってらっしゃいに、口角が上がる。「はい。いってきます」

コテージに着くと、前に一人の女性が立っているのが見えた。女性の黒髪が風に揺れる。指名手配書の女性が、そのままそこにいた。

「アンタがテアさん？」

声が震える。無理やり大きな声を出す。

「そうだけど、何か？」

冷たい声に、ふっと息を吸い込む。

「カイの呪いを、解いてくれませんか」

テアの目が、すっと細められた。

「『神』を復活させるためだ。解かないよ」

やはり、『儀式』が絡んでいたのか。それに、再開が目的。

テアが一歩こちらに歩みを進めたのが見えた。後ろに下がる気にはなれなくて、グッと前を向いた。

「私の計画は、命を軽くしてあげることなの」

命の価値を下げるなんて、どうやって。お金じゃないのだから、量を増やすわけにもいかない。いや、それよりももっと簡単だ。

「『神』は、人を生き返らせられるの……？」

笑って頷いたのを見て、思わず顔をしかめた。許されていいはずがない。

「人の命が、そんな簡単に扱えるものなわけがない！ 第一、生き返らせるには、その人のことを知らないといけないんじゃないか」

「じゃあ、君は、大事な人が死んで、生き返って欲しいって思ってる人が、この世に存在しないか思ってるの？」

言い返そうとして、言葉に詰まった。クスクスと、テアの笑い声が聞こえる。のらりくらりと発言を躲されて、これではカイの呪いを解く話にもならない。それなら一か八かだ。

「アンタは、研究者じゃないのか」

テアは相変わらず笑みを浮かべていて、どう感じているのか分からない。手に汗が滲む。

「……アンタは自分たちの代わりができることを拒んだ水と風の一族に、殺されかけた。そして、儀式を見せつけるために、二つの一族の魔力も呪いで代替したんじゃないのか」

テアの目が鋭く光る。と、すぐに弾けるような笑いに変わった。

「はっ、いいねー。ちょっとは合ってるよ」

テアはもう一歩足を出した。

「私は研究者じゃないよ。ただの協力した魔法使い。それにね、研究者の死因は自殺なんだよ。儀式を完成させた後、資料燃やして死んだ。命が軽くなるからって」

は、と小さく声が出た。自殺という言葉が、重く響く。そう思っている、自分の一族が原因ではなかったと、気持ちが晴れていくのを感じて、自分が嫌になる。

「研究を止めれば良かったのでは？」

「新聞にも載っちゃったし、難しかったかな」

明るい声は、どこか諦めたように聞こえた。

「ただ、私は彼の意思を尊重したい。だから、儀式を私だけでも完成させないと。そして、みんなに壊してほしい。命は重くあるべきだと、みんなに言ってほしい」

逆だったのだ。テアは儀式を知っている。一族の人間によって命が軽くなるのを止めようとしていた。テア



が余裕そうだったのは、ユリアナには止められないと思ったからだ。でも。

「嫌です」

テアは、一瞬キョトリとした。その後すぐ、えーと不貞腐れたような声を上げた。

「貴方を『魔術師様』とか呼ぶ人にいっぱい会いました。みんな、貴方に感謝しています」

「でも、完成させるよ」

静かに微笑むテアに、これから言うことを思い出して、嫌になる。でも、言わないと。

「……止める理由は、もう一つあ」

「ユリアナ！」

遮るように声が聞こえた。声を辿り見た先には、カイが立っていた。

「テアさんが呪いをかけたのは、僕のためなんだ！ 思い出したんだよ、全部」

思わず、テアの方を振り返る。彼女は、小さな笑みを浮かべていた。

カイは、生まれつき大量の魔力を持っていらした。小さい頃は両親が魔力を吸い取っていたが、成長するにつれて魔力量も増え、魔力を吸い取るにも使わせるにも限界があり、溢れるようになってしまった。魔力の暴走で物が壊れることもあり、父親も怪我をした。そして、カイは幼稚園に行けなくなっていった。そんなある日、テアが来たらしい。テアは魔力を十分に吸い取ってくれて、身体を魔力量に耐えられるようにすることを教えてくれた。そこからは、たくさん食べて運動する日々。そんな中、再び父親を怪我させてしまった。カイはテアに懇願したのだ。魔力を無くしたいと。テアは呪いをかけた。魔力を一定で消費し続ける呪いを。そして記憶を消した。指名手配犯に助けられたことを隠すために。

「僕が眠ったのも、両親に僕が帰ってこないと言われたからですね」

ああ、と呟き、テアを見る。テアは、さあねと笑うように言った。

両親とテアは連絡を取り合っていたのだ。魔力量に身体が耐えられるようになる日が来るのを待って。だから両親は、カイが呪いを解こうとするのを止めたのだろう。

「そういえば、さっきもう一つの理由って？」

少し口角が上がったテアが、こちらを見た。その顔を見て少し悩んだが、口を開く。

「……儀式は成功しないかもしれませんが」

え、と温度のない声が響いた。

「やってみたことがあるんです、小さい頃。一族以外の魔力でも『神』が生み出せるのか。少量だったので、分かりませんが、おそらく」

「……しようがないよね。うん、ごめん」

小さく笑った。先ほどの恐怖はもう吹き飛んでいた。そこにいたのは、一人の人間だと分かったから。気づいたら叫んでいた。

「なので！ 私が儀式を完成させます」

え、とテアの瞳が、キラリと光った。

「でも、どう使うかは私が決めますが」

テアの目を見つめる。テアは一度瞬きをした後、ユリアナを見て、いいよと言った。

「うん、それがいい。ありがとう」

何度も頷いた彼女の顔は、晴れやかだった。

テアと一緒にクララの家に戻った。両親が怒らないか心配だったが、テアは大丈夫だと笑った。実際、両親はテアの顔を見た途端に、クララの部屋に連れて行った。二人は、リビングに立っていた。不意にユリアナが言った。



「置いてって、ごめん」

「僕のためでしょ。ユリアナは悪くないよ」

カイは笑いかけたが、ユリアナは首を振る。

「私、お前を利用しようとした」

カイは、何も言わなかった。ああ、言ってしまったと、顔も見れなくて、さっと俯いた。

「ほんとは、少しホッとした。これで、もう、お前に会わないで済むって」

カイはこちらをじっと見つめるだけだった。

「会った時、カイの呪いを解いたら、みんなが認めてくれるって、そう思った……ごめん、お前のためなんかじゃなかったのに、解いてあげるみたいな顔して」

「……顔、上げてよ」

ゆっくりと顔を上げた先にあったカイの顔に、息を呑んだ。カイは静かに微笑んでいた。

「ちょっと、知ってた。疑わないわけじゃないよ、僕を助けようなんて人、そうそういないから」

ごめんと言うと、カイは顔をしかめた。

「そんな謝らないで。だってユリアナは引っ張ってってくれたでしょ？ 嬉しかった」

ドキリと心臓が音を立てる。そんなことで、嬉しいと言ってくれるのが嬉しい。

「こうやって呪いも解いてくれて、忘れたことも忘れてた記憶も、思い出させてくれた」

カイは、満面の笑みで微笑んだ。

「ありがとう！」

うん、と精一杯笑い返す。母の件もこうやって肯定してくれたのだ。ふと、伝えたいことができて、口を開く。

「母さんに会いに行こうと思う。そしたら、儀式を完成させるよ。だから、それが終わったら、その」

思わず、声が詰まる。今まで、多くの言葉を飲み込んできた。否定も、文句も、頭の中だけで何度も唱えてきた。その度に、分かってもらうことを期待していた。でも、言わなければ伝わらないし、世界は思いの外、寛容だった。今も、まだ少し怖い。でも、カイはため息をつかないと信じているから。

「また一緒に旅しない？」